

3) 乳癌肝転移再発に対するリザーバー肝動注化学療法の実験

下山 雅朗・嶋村 和彦
金子 和弘・鈴木 晋
岡田 貴幸・青野 高志
武藤 一郎・長谷川正樹 (県立中央病院) (外科)
小山 高宣
湯川 貴男・尾崎 利郎 (同 放射線科)
石川 浩志・関 裕史

乳癌肝転移例の予後は極めて不良で治療に反応しにくいことが知られている。我々は8例にリザーバー肝動注化学療法を経験した。CR 1例, PR 5例で奏功率は75%だった。ポートの閉塞や薬剤分布不良などのカテーテルトラブルが8例中6例に認められ, NC, PD の症例も薬剤分布不良を認めた。動注開始後の生存期間は中央値12.7ヶ月, 平均15.6ヶ月であり, 肝動注による明らかな生存期間の延長は認めなかった。しかし, 死亡例で肝転移により死亡したと思われるものは1例のみであった。

結語: 肝動注による肝転移のコントロールは比較的良好と思われたが, 全身転移の制御とカテーテル管理が重要と思われた。

4) 乳癌再発症例の検討 —局所治療を中心に—

神林智寿子・親松 学
小山 諭・林 光弘 (新潟大学)
佐藤 信昭・畠山 勝義 (第一外科)

【目的】局所治療の有用性を明らかにするために再発乳癌症例を retrospective に検討した。1981年以降に手術が施行された乳癌患者385例で再発例81例のうち1999年1月現在予後確認されている48例を対象とした。

【結果】①局所治療群と非局所治療群では生存期間に有意差は認められなかったが, 再発後生存期間は局所治療群で有意に長かった ($p=0.0316$)。②術後無病期間が2年以上の症例は再発後の生存期間が有意に長く ($p=0.0125$) さらに局所治療群の方が生存例が多かった。

以上より乳癌再発症例において, 症例を選んだ局所治療は有用であると考えられる。

5) 当院における乳癌術後肝転移切除例の治療実験

村田 大樹・島影 尚弘
草間 昭夫・岡村 直孝
内田 克之・若桑 隆二 (長岡赤十字病院) (外科)
田島 健三・武藤 輝一

乳癌の肝転移は外科切除となることは稀である。今回単発肝転移の切除術を2例経験した。症例1は65歳の女性。1995年4月右乳房に直系約2cmの腫瘍を触れ, MMG, Echo, ABCにて右乳癌と診断。5月8日 modified radical mastectomy 施行した。術後2年1カ月の腹部CTにて, 肝S4に異常を認め, 精査にて liver meta と診断。1998年11月25日右拡大右葉切除術を施行した。症例2は51歳の女性。1997年12月3日右乳房に硬い腫瘍を触れた。MMG, Echo, ABCにて右乳癌と診断。12月8日 modified radical mastectomy を施行した。術後2年1カ月のEchoにて肝左葉外側区に hypoechoic mass を認め, 精査にて liver meta と診断し, 1999年6月1日肝左葉切除術を施行した。

III. 教育講演

『これで決まった閉経前乳癌の薬物療法』

新潟県立がんセンター臨床部長

佐野宗明先生

IV. 特別講演

「遺伝子診断の乳癌診療への応用」

大阪大学医学部腫瘍外科教授

野口眞三郎先生